

---

『物流 Weekly』連載原稿

『日本ロジファクトリーの物流ケース・スタディー』

“社長！それは違います！” 第142回

---

<タイトル>

「今年も重大事故に気を付ける時期が来た」

<本文>

車両事故、商品事故対策については、ほとんどの物流会社が細心の注意を払っていることであろう。私のクライアント先を見ると、事故件数としては夏のシーズンに多く発生しているが、事故費の金額自体は八月末から九月にかけて多く計上されているという傾向がある。これはドライバーの所謂「夏バテ」からくるもので、重大事故は特にこの時期に発生するケースが多い。特に最近の猛暑、異常気象による影響は、ドライバーのからだに想像以上の疲労を与えているようである。平均年齢が高くなっている会社では、風邪、腰痛、頭痛、肩こりといった症状が見られるドライバーが必ず出てくるだろう。

最近の特徴として見られるのは、これらの症状として表にあらわれない「神経系」のダメージを受けているドライバーが多いこと。燃料高騰に伴う燃費走行や、高速を使用しないで下道を走る疲労と渋滞のストレス、客先での細かな検品、セキュリティ対応など、日本の物流業は肉体労働から神経業務へとシフトしている。神経系のダメージを受けているドライバーは、季節の変わり目や気温差・気圧差に弱い。私事ながら、深夜業務の多い昼夜逆転のドライバー時代には、この時期に疲労が限界に来ており、皮肉にも十一月二十三日の勤労感謝の日にピークに達していた。

昔のように、朝礼時のチェックや配車担当者による一見だけでそのドライバーの体調が判断できない時代であるが、アルコールチェック、点呼、安全確認、ヒアリハットの確認や、ドライバーとの対話時間を増やすなど、基本事項の再点検、再確認をお忘れなく。また、自動車安全センターへのドライバーの運転免許、点数の定期的な照会業務の徹底も付け加え、いま一度、安全運転の徹底をお願い申し上げます。